

10月



あの日のあの川 リレー日記 ～第70話～

あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第70話主人公 仙北周平

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直) 研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：北海道札幌市豊平川)

「夕べ河畔の豊平に」

いつのこと？： 高校時代

どの川？： 豊平川(北海道札幌市)

白川研究室に所属する仙北と申します。今回は私の高校時代の思い出を、母校の前を流れる豊平川の中で遡ってみたいと思います。

私の出身地である札幌市は、豊平川という石狩川水系の大きな支流が市街地を東西に分けるように流れています。札幌市は10区を有する大きな都市であり、豊平川は市民の生活圏を分ける境界ともなっているため、札幌市民はよく「川の向こうは分からない」と各々の対岸の事情について言います。私の実家は川の西側にあり、私の母校もまた川に面して西側に位置していたので、「川のあちらか、こちらか」という観点から言うと、私は地元を離れるまで「西側」の市民だったと言えます。(仰々しく「西側」などと言いましたが、実際に豊平川を境界線として、冷戦期に北海道が東西陣営に分割されているという設定の小説もあるようです。)もちろん、現実世界では兩岸の市民ともに等しく資本主義と民主主義の恩恵を享受しつつ生活しているわけですが、札幌という都市が西側から発展し、現在の中心部も西側にあるという事情からか、川の東側は社会的特性としての「下町」の雰囲気の色濃くと言えます。では反対に、西側の社会的特性は押し並べて「下町」の対称としての「山の手」であるかと言うと、決してそうではありません。札幌には、東西を分ける豊平川本体とともに、南北を地質的に、あるいは社会的特性の観点から分ける線が存在します。それは豊平川の扇状地の末端部分を示す線であり、現在の都心部付近においては、それは大体JRの線路に置き換えられるものです。より古く、多少のステータスを持っているようにも見える「西側」も、間近に寄って見れば、今日では線路によってより明瞭に分けられた南北で、互いに事情は異なり、北側が北海道大の文教地区と(恣意的な見方をすれば)「質素」な住宅街が目につくのに対し、南側は官庁街、繁華街に続いて「ハイソ」な住宅街が目につくということに大方の市民の異論は無いでしょう。上述の「山の手」を(再び恣意的に)札幌の地図の中に見出すのであれば、それは川の西側であり、尚且つ地盤の良い扇状地とその背後の山々の麓に位置するエリアということになります。そして私の実家は北側である一方、母校は南側、すなわち「山の手」に位置していました。(ちなみに西区には「山の手」という住所が存在し、ここは「下町」の対義語としての一般名詞：「山の手」が札幌において要する私の二つの条件に完全に合致した場所です。)

そんな「山の手」の母校は、私にとっては居心地の良い場所とは言えませんでした。同級生の多くは、近隣の、やはり「山の手」に位置する伝統校と言われる中学や、教育大の付属中から進学して来ており。私の体感では学年の三分の一程を占めていたと記憶しています。彼・彼女らは、入学当初から中学時代の友人と親しげに話していましたが、当時学力的にも同級生に引け目を感じていた私は、その輪には入り難さを感じたことを覚えています。もちろんそんな「最大勢力」の同級生たちも、個人個人の人間性を見れば親しみやすいことも多かったと思いますが、家庭環境や教育環境の違いから自分とは異なる文化を持つ彼・彼女らを、私は「教室」の中では最後まで仲間として見ることはあまり出来ませんでした。

しかし私の高校時代は友人に恵まれなかったわけではありません。教室では、常にどこか卑屈に構えていた私でしたが、放課後では、部活動として取り組んだテニスで素の自分を出してボールを追い、結果として、現在に至るまで親交が続く友人たちを得ることができたことは本当に幸運だったと思います。そして彼らとの友情は、学校のコートに収まりきらない一年生が、毎日出張で練習をしに行く、豊平川の河川敷のテニスコートで形作られたものでした。顧問の先生や先輩の目が行き届かない河川敷で、思う存分自由にボールを打ち合い、疲れれば堤防の階段に座って、川を眺めながら学業や友人関係などについて思いの丈を吐露し合った時間は、私の高校生活で最も有意義で、楽しくリラックスしたものでした。その後、我々同期は河川敷の修行期間を経て、新人戦を前に行われた部内戦で先輩たちを打ち負かし、我が物顔で学校のコートを占有するようになりましたが、今でも彼らと当時を振り返ると、数ヶ月に満たない河川敷での練習期間の思い出が不思議と多く語られています。

それから私にはもう一つ、豊平川の河川敷で大切な思い出があります。豊平川の河川敷では毎年7月に大きな花火大会が開催され多くの人で賑わいますが、当時付き合っていた彼女と見た花火は、今となっては高校時代の忘れられない一コマになっています。私は元来、花火というものにあまり興味がなく、一瞬の輝きとともに散りゆく儚さに日本的な美を感じない訳では無いものの、あまりにごった返す人混みの中では興醒めの念がどうしても勝ってしまい、人に誘われて観に行く度に後悔する資は今も変わりありません。当時、部活の友人に誘われた際にも私は初め面倒だと感じましたし、おまけに「浴衣を着たいから悪いが付き合ってくれ」と言われたときには良い迷惑だと思った記憶があります。（確か友人は、私の彼女と同じであるダンス部の子を誘うために、そのようなことを思いついたのでした。）当日は、高校で友人と浴衣を着込んでから、女性陣と合流という形だったと思いますが、私はいざ河川敷に繰り出そうという段に至っても、あまり乗り気ではなかったように思います。その頃、彼女の方からの告白によって始まった交際も一年が経とうとしていましたが、今思えば大変申し訳ないことでしたが、常にどこか気恥ずかしかった私はその頃に至っても、自分からデートに誘ったりするようなことはほとんど無かったのです。ましてや学校のすぐ近くで行われる花火大会ともなれば、至る所に同級生の目があるわけであり、私のテンションは明らかに低かったように思います。四人で会場に到着すると、案の定友人は私と彼女を置き去りにしてどこかに消えてしまい、私は随分と冷めた心持ちで二人での会話を始めました。会話の内容はあまり覚えていませんが、耳を塞いでいても大学受験の足音が聞こえてくる時期でしたから、その迫り来るものに対する鬱々とした気持ちを私はだらだらと口にしていただいでしょう。私は、上がりそうに無い自分のテンションに諦め感じつつ、一方で、流石に彼女に申し訳ないのでは無いのかという念を徐々に覚えました。しかし、彼女はそんな私との会話に付き合いながらも、嫌な顔一つせず相槌を打ち、また彼女自身の楽観的で、しかし非常にストイックなその先の展望を私に語っていた様に思います。今となっては彼女があの日、浴衣を着ていたかさえ記憶は怪しく、着ていたとしてその浴衣姿を私は褒めたのか非常に不安ですが、彼女の瞳が打ち上がる花火を映しつつ、ちょうど豊平川の水面の様に輝いている光景だけは今も昨日のこの様に思い出することができます。

私と彼女はその後、（彼女の方は彼女らしく紆余曲折を経て）それぞれの志望を叶えて、無事に大学生となったのですが、私は結局大学生になった彼女の姿を見ることはありませんでした。花火大会の頃には、まだ十分に開かれていなかった私の心でしたが、夏休みの再会を、札幌駅の北口で約束した日を迎えた頃には、彼女の人間性の深さと美しさに突き動かされて、素直に自らの思いを打ち明けられる様になっていました。しかし、ちょうどその時節山々から流れ下る雪代の様に、あまりに止め処なく溢れ出した私の思いは、二人の間に存在した愛情の微妙なバランスを崩してしまい、コロナで閑散とする新天地での生活を始めた矢先、私は彼女を失ったのでした。当時の私が悲嘆に暮れたのは言うまでもありません。

豊平川にまつわる思い出はこれらに限らず、幼少期からの記憶の節々に印象を残していると言えます。北の都を離れてから幾分か時間が経ち、日々の喧騒の中でも、常に豊平川のせせらぎが聞こえていた高校時代も、記憶の彼方へと遠ざかっていく今日この頃ですが、私にとって豊平川は、かつて育んだ思い出を運び去ってしまう冷厳な急流としてではなく、人生という名の茫漠とした大地を進む私の魂に、友情や愛情が持つ温もりをいつまでも送り届けてくれるもので合っていると願っています。

（次は三浦護人さんにバトンを託します）